



フレッド・ピアス著 藤井留美訳
 2016. 外来種は本当に悪者か？
 320 pp. 草思社

外来生物法の施行から早や10年。侵略的外来種は極力排除すべしとの精神漸く世に定着したかと思いきや、それに抗うかのような野心的な本が出版された。話題書となりつつあるフレッド・ピアス著『外来種は本当に悪者か？』である。

本書の主張は至ってシンプルで「世界では在来種を絶滅に追いやった外来種もあるけれど、一方で外来種が生物多様性を高めたり利益をもたらしたりした例も多い。場合によっては外来種の存在を肯定すべきである」と言うものだ。例えば、ピアスはハワイ諸島を事例として「外来種の導入等の理由で絶滅が確認された植物は71種に過ぎない。逆に外来種によって同地の生物多様性は1.5倍になった」と持ち上げる。

ピアスが数多く取り上げた外来種の有益性を一々検証していく余裕はない。ここでは「たとえその内訳に外来種を含んでいようとも、種数は単純に多ければ多いほど良い」とのピアスの前提自体が評者はもちろん、大多数の生物学者には受け入れ難い珍説とだけ申し上げておこう。この他「強力な外来捕食者としてネコが問題視されるが、その一方でネコは飼い主を健康にする。ペットを飼っている人の医療保険の請求数は飼っていない人よりも30%少ない」との物言いは生態系と医療制度の問題の無意味なごった煮でしかない。

次に目立ちたくないものの本書中で批判的に用いられている「民族浄化」との表現から外来種排除を人種差別と関連付けるピアスの思考が垣間見えるし、「動物の権利」との単語からピアスはアニマルライツ論に共感しているのかとの疑念も沸いてくる。また、「外来種の拡散は最後の氷河期後に動植物が定着していく過程の続き」との主張は、ブラックバス擁護派の「日本在来とされる淡水魚だって元々は大陸から渡ってきた」との詭弁そのものだ。最後に「過去の地球では5回の大量絶滅があったが、その都度多くの生き物が進化してきた。ならば外来種によって多くの在来種が滅びたとしても、その後新たな生物多様性が生じることを期待してもよい」との超楽観論は無責任の極みでしかない。どうやらピアスは「人間は地球上

のあらゆる生物の生殺与奪権を持った特殊生物」（青木淳一『自然の診断役土ダニ』より）との認識を決定的に欠いていることがうかがえる。

然しながら、本書を荒唐無稽のトンデモ本と一笑に付してはならない。平成28年10月23日付朝日新聞の天声人語の執筆者は、本書の感想として「日本の自然は外来種の力を借りて立ち直ろうとしているのか。そう思うと遠い国から来たものたちへの視線も（従来の悪者との扱いから）変わる気がする」と結んでおり、ピアスの主張に賛意を示している。また、同日付朝日新聞には有名な進化学者による書評が掲載され、そこでも「この本をきっかけとして外来種の是非の議論を始めよ」とのピアスの主張に沿った見解が述べられている。ピアス本が世間の一部で定着しつつあるのは厳然たる事実である。

評者は「外来種を駆除すべきか否か今一度冷静に議論すべし」との主張には全く賛同できない。議論の開始となれば、先輩方があれだけ多大な政治コストを払い苦勞して黙らせたブラックバス有益論が再び蒸し返されるのは目に見えている。「新たにバスを導入するのは良くないが、既にあるものについては有効活用した方が良い」などと言いつつ、ブラックバスは入れたもの勝ちになってしまう。

ただ、「希少種保全のための外来種駆除は必要不可欠」との我々の信念は虫屋業界内に限定された常識なのであって、必ずしも社会の普遍的価値ではないことを再認識する必要がある。昨今の社会情勢を勘案すると、日本人の大多数は当分「明日は今日よりも貧しい」生活を余儀なくされるはずだ。「おまんまを満足に食べられない子供がいるのに、なぜ税金を使って“良い”外来種を駆除しなくてはならないのか?」。希少甲虫の保全に取り組む方々はこんな世間の疑惑に対し、常日頃から環境保全の必要性を今以上に訴えなければならない、ということだ。

本書は外来種駆除に取り組む人々にとって忘れがちな課題を突き付けたとの意では大いに意義ある書籍である。

(注) 評者は原著に目を通していない。したがって、この書評は翻訳者によるフィルターを挟んだ訳書に対するものと御理解いただきたい。

(保科英人)